

て当時でもまったく新しい性格を具えていた。それは自身の定める『演劇史』が含むべき範囲をすべて網羅していたのである。こうした範囲の設定は、それまでの中国における伝統的観念やテキストが抱える限界、そして当時の演劇評論家がもっていた視野といったものを完全に脱することを可能にした。あるいは、この本こそが中国『演劇史』の枠組みを設定する上で、それまでとはまったく異なる新しい局面の始まりを見せてくれたといってもよい⁴。従来、中国の研究者たちは古代、あるいは元雜劇や明・清時代の伝奇といったものにばかりに研究の重点を置き、依然として劇場で毎日のように演じられる花部や劇場の経営、そして役者たちの師弟間における伝授の方法や生活といったものにはほとんど注目してこなかった。そうした中であって、辻聴花は外国人研究者としての自らがもつ眼差しを中国演劇に向けようとしたのであり、当然の帰結として、そこには新たな機軸が生み出されることになった。彼の演劇史にとって、歴史と目の前にあるその時々状況というのは、どちらも関心を払わねばならない対象であった。また、この当時の中国研究者たちによる著作はいずれも文語と口語の入り混じった古めかしく難解な文章で書かれたものであり、そのことが西洋の読者たちを尻込みさせてしまう原因ともなっていた。こうしたことも手伝い、辻聴花の『中国劇』は、ごく平易な中国語であれば読むことができるという西洋の読者たちにとっても、真っ先に読むべき本となっ

たのである。

日本での公演は、梅蘭芳のアメリカやソ連における演出を直接的に促すことにつながった。ついに、西洋の観衆や劇作家たちに向けて、舞台の上で中国の舞台芸術を直に表現してみせる時がやってきたのである。『中国劇』をはじめとする辻聴花の膨大な量の演劇評論も、西洋の読者たちの目に留まるようになっていた。それは、中国演劇が西洋に伝えられてゆく過程において、また、こうした西洋の読者たちが中国演劇像を作り上げてゆく過程において、積極的な後押しをする役割を担うことになったのである。

註

- 1 作者は梁社乾 (Leung, George Kin, 1889- ?)。原籍地は広東新会、アメリカ合衆国生まれの梁は中国語と英語に精通していた。梅蘭芳のアメリカ公演に関する様々な文書作成にも関わっていた。
- 2 Leung, George Kin, "Mei Lan-Fang, Foremost Actor of China", 英語版、上海:商務印書館、1929 年、p.56。
- 3 Johnston, Reginald Fleming, "The Chinese Drama", Shanghai: Printed and published by Kelly and Walsh limited., p.13.
- 4 嗎書儀:《清末民初日本の中国戯曲愛好者》,《文学遺産》, 2005 年第 5 期, p.114-129。

近代建築の文化的脈絡を探して

霍 九 倉
(華東師範大学)



建築と文化は密接な関係にあり、建物そのものが文化であるとも言えるが、それは資材、技術、形状、機能という観点からだけでなく、その形の内面に、人々の美意識や風俗的な習慣、考え方、精神的気質などの文化的要素も含んでいる。

建築文化といってまず最初に思い浮かべるのは伝統的建築物であろうが、同様に、現代建築物も豊かな文化を持っているものと思われる。上海と東京に焦点を当ててみよう。

上海にある東方明珠テレビタワーは 1994 年に建てられ、高さは 468 メートルであり、そのインスピレーショ

ンは、唐詩に由来するそうである。唐朝詩人、白居易による「琵琶行」という詩の中で、琵琶の音を真珠にたとえ、皿に落ちる美しい音色を詠んだ箇所である。タワーの設計者は幻想に富み、11 個の大小異なるサイズで、高さが入り乱れた球体が、青い空から地上の緑の芝生に真珠のように連なり、その中の、まばゆい 2 つの巨大な球体はルビーのように空に浮いているという、まさに「琵琶行」という詩の境地を表現した。

それが元々の設計者の意図であったが、一般の人々は、東方明珠テレビタワーはキラキラ輝く真珠のように、また、タワーの下に位置する曲がりくねった河は龍のよう



に見え、真珠と戯れる龍の図、「^{ロンシージュ}龍戲珠」のイメージを持つようになった。龍戲珠は中国の伝統的な、めでたいとされる図柄である。このような見方から、人々が、建物に対して、好感と高評価を持っていると言える。あるいは、^{タンフールー}糖葫芦（串刺しの菓子）のようだという見方もあるそうである。糖葫芦は、中国の特産品の1つであり、見た目も味もよいお菓子である。このような見方も「中国風」というイメージが現れている。

同じようにタワーを例にすると、東京スカイツリーは2012年に建てられ、高さは634mであり、今現在、世界一高いタワーである。東京スカイツリーの足元は三角形になっており、上にいくほど細くなり、円柱の形になる。タワーの構造は日本の国宝の1つである“五重塔”に似ていて、主に地震と強風を防ぎ止めることに効果的だそう。夜になると、トップと2つの展望台がライトアップされ、白い光で照らされると、まるで日本を象徴する富士山の山頂の積雪を思わせる。

東京スカイツリーの設計には、モデルとなったものが存在したのだろうか。大地に突き刺している日本刀であるという説もある。確かに日本は武士の伝統が長く、刀

はサムライ精神を最も体現しているとも言える。設計者が無意識に刀のイメージを取り入れたとしても理にかなっているのではないだろうか。実際、東京スカイツリーの外観も、刀のシルエットが確かにある。また、日本の伝統人形である“こけし”の形とも似ているような気がする。それは丸い頭と細い体の形をしており、長いスカートの形がスカイツリーのシルエットに似ているようにも見える。

一方、上海博物館については、中国古来の天文学における宇宙構造論の理念を受けている。また遠くから見ると、中国伝統の青銅器のようでもある。

そして、江戸東京博物館については、現代的な鉄筋コンクリート構造だが、単に形だけから見ると、まるで弥生時代における高床式倉庫のようである。

このように、近代建築は、機能を重視するだけでなく、魂を持った独自のスタイルが求められる。このため、近代建築が、多かれ少なかれ伝統文化の中からそのインスピレーションを吸収し活かすことにより、その建築物を見た人々は、より多くの文化的要素を感じ取ることができるのではないだろうか。

近世日本の尼寺：「駆け込み寺」東慶寺と「比丘尼御所（びくにごしょ）」制度

Nicolette Lee
(ブリティッシュコロンビア大学)



2012年12月3日から22日まで、私は神奈川大学非文字資料研究センターに訪問研究員として在籍した。この研究機会を通じて修士論文の資料を見つけることができ、非常に有益な経験であった。

1. 研究テーマ

私の研究テーマは、近世日本の尼寺である。このテーマに関心を持つようになったのは、江戸時代に宗教を実践していた主な女性たちについて研究を始めたときだった。私は「縁切り寺」の尼僧、皇女などが住持する尼寺「比丘尼御所」の尼僧、そして有名な「熊野比丘尼」について簡単に考察し、権力と尼僧たちの人脈との関連性が根底にあるテーマであることを確認した。私が特に注目したのは、女性同士の交流の重要性である。尼僧たちは皇女などの平信徒に手を差し伸べ、彼女らの尼寺を支援し、布教活動を行った。この研究を進めるなかで、私

は焦点を上流階級における尼寺制度である「駆け込み寺」と「比丘尼御所」の2つに絞り込んだ。これら2つの制度に焦点を絞る一方で、尼寺の制度的詳細に注目することで、尼寺の自律的地位について分析しようと試みた。そこからわかったのは、尼寺および尼僧への敬意や評判が、彼女たちの政治的・経済的権威を補完するある種の通貨のような役割を果たし、尼寺に幕府および朝廷と同等の権力と影響力を持つことを可能にしたということである。

2. 調査訪問の目的

調査訪問に先立って、駆け込み寺と縁切り寺に関しては、英語による研究資料を入手していた。特に鎌倉の東慶寺は、江戸時代に幕府から公認された2つの縁切り寺のうちの1つとして有名な寺なので、資料を見つけることができた。しかし比丘尼御所の制度については、注目